科学のもつ一般性の追求*

――ヘンダーソンのパレート・セミナー開設と『一般社会学概論』の英語訳版――

吉原　正彦※

第1節　ハーバード大学における社会学科の創設
第2節　パレート・セミナーの開設と J. H. ロジャースとの知遇
第3節　パレート・セミナーの情況：そのⅠ
第4節　パレート・セミナーの情況：そのⅡ
第5節　パレート社会学の執筆と英語訳版の書名

第1節　ハーバード大学における社会学科の創設

アメリカの社会学の発展は、1892年に社会学科を創設したシカゴ大学やコロンビア大学が中心となり、ハーバード大学はこれらの大学に後れをとっていた。ようやくにして社会学科創設の具体的な動きがみられるようになったのは1927年、奇しくもヘンダーソンがパレートと出会った年である。

ハーバード大学社会学科の前身は、社会倫理学科であった。社会倫理学科は、1905年、「若者たちが、現代の社会問題に努力を傾注する」ことを目的として、技師で実業家のA. T. ホワイト（Alfred Tredway White 1846-1921）の寄付によって、ユニテリアン派の社会福音思想家F. G. ピーボディ（Francis Greenwood Peabody 1847-1936）を初代の学科長として生まれた。この学科で講じられた内容は、学科長のピーボディが論じる社会問題や社会政策にみられるように、「ユニテリアン派の教義に対する彼の体系というレンズを通して捉えられて」おり、科学としてよりは、道徳哲学上の問題であった[1]。

第一次世界大戦が終わり、社会倫理学科は、R. C. キャボット（Richard Clarke Cabot 1868-1939）学科長の20年代に、彼の「社会倫理学A：人間関係」講座を中心にして学部および大学院の講座を増やし、最盛期を迎えた。キャボットは、ピーボディと同じように、社会問題の解決を論じるにあたって、倫理学および個人の良心に基づく行為に焦点を置いていたのであった。しかし、1909年にC. W. エリオット（Charles William Eliot 1834-1926）からハーバード大学総長を引き継いだローレンス・A・ローウェル（Lawrence Abbott Lowell 1856-1943）総長（1909-1933）は、社会倫理学科のあり方に疑問を抱き、道徳哲学や倫理学ではなく、科学志向に立った社会学を構想していた[2]。

＊ 本稿の執筆過程で、京都大学名誉教授・飯野春樹先生の訃報に接した。飯野先生は、わたくしに、言葉に尽くせぬほどの多くのことを教え、導いてくださった。この一連の研究は、先生への恩返しと新たな挑戦の意味をもっていたのであったが、今は、残念の一言に尽きる。飯野春樹先生に対して、これまでのご恩に深く感謝申し上げるとともに、この研究の完成を誓いたい。

1）Lawrence T. Nichols, "The Establishment of Sociology at Harvard: A Case of Organizational Ambivalence and Scientific Vulnerability," *Science at Harvard University: Historical Perspectives*, edited by Clark A. Elliott and Margaret W. Rossiter, Associated University Press, 1992. p. 193. 当時のハーバード大学のC. W. エリオット総長（1869-1909）は、ピーボディと義理の兄弟であり、二人とも同じユニテリアン派として宗教および社会科学についての考えをまったく共有していたといわれる。

2）*Ibid.*, pp. 202-205.

※青森公立大学

他方、社会学科をハーバードに生み出すもう一つの動きが経済学科にあった。当時の経済学科には著名な研究者が多くおり、新古典経済学の立場に立つF. W. タウシッグ（Frank William Taussig 1859-1940）や経済史家で経営大学院の最初のディーンとなったE. F. ゲイ（Edwin Francis Gay 1867-1946）がいた。また、政治経済学教授で、後にアメリカ経済学会会長となったT. N. カーヴァー（Thomas Nixon Carver 1865-1961）が1900年からハーバード大学で最初の社会学講義を始めており、1927年にはT. パーソンズ（Talcott Parsons 1902-1979）が講師として就任し、同じ年にJ. A. シュンペーター（Joseph Alois Schumpeter 1883-1950）が客員教授として「一般経済学」を講義していた[3]。経済学科の教員たちは、社会科学の新しい分野として学科内において社会学の拡張を考えていたが、ローウェル総長は、社会倫理学を吸収するような形で社会学の充実と発展を図ろうとしていたのである。

1927年、C. H. ムーア（Clifford Herschel Moore 1866-1931）教養学部ディーンのもとに、哲学科のR. B. ペリー（Ralph Barton Perry 1876-1957）を委員長とする「社会学と社会倫理学に関する委員会」が設けられた[4]。

新しい分野の責任者となるべき候補者として、ロシアから亡命しミネソタ大学社会学教授のP. A. ソロキン（Pitrim Alexandrovitch Sorokin 1889-1968）と社会進化論に立つロンドン経済政治学大学院のL. T. ホブハウス（Leonard T. Hobhouse 1864-1929）が挙げられた。ソロキンは道徳主義的接近を排除し、厳格で自然科学的思考に立っているのに対して、ホブハウスは、ピーボディやキャボットと同じように価値や道徳に強い関心を持っていた。

1930年、道徳哲学ではなく自然科学の立場から社会学研究を推進したいと考えていたローウェル総長は、ソロキンを最初の社会学正教授として迎えた[5]。

最初の社会学正教授となったソロキンは、就任してまもなく「社会学・社会倫理学委員会」の新たな委員長となり、社会学を独立した学科として創設することを答申した。学科の名称については社会倫理学にこだわりを持っていたキャボットの抵抗があったものの、ローウェル総長は、1931年の秋、学部教育と大学院教育のために社会学科（Department and Division of Sociology）を創設し、初代の学科長としてソロキンを任命した[6]。

新しい社会学科では、専任教員が少ないこともあったが、隣接分野からのスタッフの協力をえて、学

3） シュンペーターは、1932年にハーバード大学に迎えられることになる。高城和義『パーソンズとアメリカ知識社会』，岩波書店，1992年．77頁．

4） L. T. Nichols, *op. cit.*, p. 209. 高城和義，前掲書，80頁．委員会のメンバーとして、社会倫理学のキャボット、政治学のW. Y. エリオット（William Yandell Elliott 1896-1979）、経済学のゲイ、歴史学のA. M. シュレシンジャー（Arthur Meier Schlesinger 1888-1965）とE. A. ホイットニー（Whitney）、それに人類学のE. A. ホートン（Earnest Albent Hooton 1887-1954）がいた。

5） L. T. Nichols, *op. cit.*, p. 211.

6） ソロキンによると、新しい学科の計画にあたっては二つの条件が付けられ、非常に難しいものであったという。第一に、社会学者を外部から登用せずに、教育・研究に関する第一級の学科とすること、第二に、新しい学科は、社会倫理学科を吸収・発展させるものであること、であった。また、創設時の専任スタッフの構想は、学科長のソロキンの他、正教授のR. キャボット、準教授のJ. フォード（James Ford 1884-1944）、専任講師のC. ジョスリン（Joslyn）とT. パーソンズ、それに講師のP. ピゴーズ（Pigors）とW. L. ウォーナーであった。
しかし、ローウェル総長からは、最終的には了解されたものの、経済学科に所属していたパーソンズに対してだけ難色が示されたという。その理由は、パーソンズが社会学よりも在籍していた経済学に関心が薄く、経済学科での彼の業績は優れておらず、経済学よりも社会学でより優れた業績を挙げるであろうと、経済学科が彼の移籍に非常に喜んでいたというものであった。Pitirim A. Sorokin, *A Long Journey*, College and University Press, 1963. pp. 242-244.

際的な研究を可能とするようなさまざまな講座が設けられた。たとえば、A. D. ノック（Arthur Darby Nock 1902-1963）の宗教社会学、W. M. ウィーラー（William Morton Wheeler 1865-1937）の動物社会学、G. W. オールポート（Gordon Willard Allport 1897-1967）の社会心理学、W. L. ウォーナー（William Lloyd Warner 1898-1970）の社会人類学などである。そして、教育大学院のG. デアボーン（George Van Ness Dearborn 1869-1938）が中心となって「人口問題」についてティーム指導の方式をとり、その一人として名前を連ねていたのがヘンダーソンであり、彼は「人口の質的問題」を担当していた。

社会学科は、他の学科からの協力を得て生まれたが、他の学科に所属していた教授たちは、単に社会学科で講義のみをしていたのではなかった。彼らは学科の定例会議に出席し、しかも投票権を有していた。そして、学科創設時から講義を行っていたヘンダーソンも当然に定例会議に出席をし、意見を述べ、社会学科発展のために大きな影響を及ぼしていくのである。

こうして、ハーバード大学社会学科は、学際的な講座とユニークな学科運営によってシカゴ大学と競い、優れた研究者を輩出していくのである[7)]。

第2節　パレート・セミナーの開設とJ. H. ロジャースとの知遇

社会学科が創設された2年目の1932年、ヘンダーソンは、学科長のソロキンから正式な許可を得て[8)]、大学院生を主な対象としている「社会学セミナー（Seminary in Sociology）」の一つとして、いわゆる「パレート・セミナー」を開設した。それは、社会学研究を本格的に始めたハーバードにおけるパレート社会学啓蒙の第一歩であると同時に、ヘンダーソンにとっては、社会科学深化の船出であった。

『ハーバード大学要覧』の1932年度版(1932-1933)によると、「パレート・セミナー」の正式な主題は、「パレートおよび科学的探求の方法（Seminary on Pareto and Methods of Scientific Investigation）」とされ、通年講座による毎週木曜日、時間は16時15分から18時15分までであり、「この講座は、フランス語もしくはイタリア語の読解力を要する」と記載されている。担当者は、いうまでもなくヘンダーソン、それに彼の友人でありボストンの法律家でハーバード大学の評議員でもあるC. P. カーティス（Charles Pelham Curtis Jr. 1891-1959）であった[9)]。

こうしてパレート・セミナーは、ホーマンズがいうような「非公式のセミナー」ではなく[10)]、初めから単位を認定する正規の講座として生まれたのである。最初の履修者は12名であり、そこにはG. C. ホーマンズ（George Casper Homans 1910-1989）やパーソンズの弟子であるR. K. マートン

7）L. T. Nichols, *op. cit.*, pp. 213-214. 高城和義，前掲書，80-82頁.

8）Letter from Pitirim A. Sorokin to L. J. Henderson, Jan. 2 1932, Henderson Collection Folder 16-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

9）ヘンダーソンとカーティスとは1928年9月頃から書簡を交わし、とくに最初のパレート・セミナーの過程で、1933年3月くらいまで幾度となく意見の交換をしていた。ヘンダーソンはイタリア語が心許ないらしく、また感情の表明である残基の理解にかなり苦しんでいたと思われる。Corespondence between L. J. Henderson and C. P. Curtis Jr., from 1928 to 1933, Henderson Collection Folder 4-13, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

10）George C. Homans, *Coming to My Senses: The Autobiography of a Sociologist*, Transaction Books, 1984. p. 104.

(Robert King Merton 1910-) の名前がみられる[11]。

ヘンダーソンがセミナーを進めるにあたって、もっとも悩ましたのは、教材となるパレートの書物であった。履修条件としてフランス語ないしはイタリア語の読解力があったが、できるだけ多くの学生に学ばせたいと考えていた彼にとって、フランス語版を使わざるをえないことは、大きな制約であった。英語訳版が一刻も早くでることを望んでいたのは当然である。

折しも、パレート・セミナーが行われていた頃、パレートの『一般社会学概論』の英語訳が進められていた。ヘンダーソンは、セミナーの開設が決まると、パレートの翻訳権を持っているハーコート (Harcort) 社に英語訳版の出版時期を問い合わせていた。当初の出版予定は1933年であったが延び延びとなり、苛立った彼は、「フランス語が読めない学生のために、校正刷りを送ってくれるように」という要望を度々送り、ようやく1934年の5月に校正刷りが使えることとなり、1934年—1935年に、出版社から送られてくる章ごとの校正刷りを用いてセミナーを行ったのである[12]。

『一般社会学概論』の翻訳は、コロンビア大学のイタリア語学者のA. リヴィングストン (Arthr Livingston 1883-1944) の手によってなされていた。当初ヘンダーソンが聞いていたのはイェール大学社会科学科教授のJ. H. ロジャース (James Harvey Rozers 1886-1939) であった。翻訳者が違っていたことの事実は、ヘンダーソンが彼と接触をとる過程で知ることになったが、ロジャースと知遇を得たことは、セミナーを始めた彼にとって大きな激励となった。

ロジャースは、アメリカ人としてパレートの唯一の弟子であり、しかも、すでにイェール大学でパレート社会学のセミナーを行っていた[13]。彼の存在を知ったヘンダーソンは、「この分野では、多くの側面でお話にならないほど無学ですが」と断りながらも、パレート社会学について「今後より一層の体系さ、正確さ、そして厳密さを持たせて発展させなければなりませんが、科学方法を扱った書物として右に出るものはありません」という書簡を送った[14]。

ヘンダーソンの書簡に同封されていた「事実への近似的定義」の論文を読んだロジャースは、「パレートの科学方法の論述に対するあなたの評価をうれしく思います。...われわれのもっとも優れた幾人かの研究者による非常に望ましい反撃によって、わたくしは講座を続けていく勇気がわいてきました。そして社会学者によってパレートがことごとく無視されているという事実は、抑制というよりも激励として役立っています。あなたがこの分野で書かれることを今後ともお知らせくださることを確信してますし、近いうちにあなたとお近づきになれる喜びを切に希望します」と述べている[15]。

その2ヶ月後の1933年5月 (5月4日付け書簡で、来週の月曜日となっている)、ヘンダーソンは、ロ

---

11) "Pareto Seminar," Henderson Collection Folder 14-4, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

12) Correspondence between L. J. Henderson and Harcourt Brace and Company, Jan. 30, Feb. 2, Oct. 26, Oct. 27, 1932, April 29, 1933, May 2, and May 26, 1934, Henderson Collection Folder 6-8, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

13) ホーマンズによると、アメリカで初めてなされたパレート社会学に関するセミナーは、ヘンダーソンであるとしているが、これは明らかに、ホーマンズの記憶違いである。G. Homans, *op. cit.*, p. 104.

14) Letter from L. J. Henderson to James H. Rozers, March 9, 1933, Henderson Collection Folder 15-12, in Baker library Archives, Harvard Business School.

15) Letter from J. H. Rozers to L. J. Henderson, March 16, 1933, Henderson Collection Folder 15-12, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

ジャースの招きでイェール大学に赴き、彼のパレート・セミナーに出席した。セミナーに参加したヘンダーソンは、ロジャースに宛てた書簡で「わたくしは、先週、何とすばらしい時を過ごしたか、そしてわたくしのパレート理解があなたがたのものと一致し、あなたやラッカの知識によって確認されたことが、何ともいえない満足を与えてくれたことを、まずもってあなたに申し上げます。この経験は、わたくしのこれまで行ってきたことが、やるだけの価値が充分にあるという確信を非常に強めてくれました」と、その感激を述べている[16]。

ヘンダーソンの感激は充分に理解できる。ロジャースが指摘しているように、パレート社会学の評価は、彼の所説がイデオロギー、特にファシストと結び付けられていることもあり、決して高いものではなく、むしろ低く、重要でないものとして受けとめられていた。そうした情況でのヘンダーソンとロジャースの出会いは、お互いの研究を勇気づけるものであった。とくにそれまで自然科学の世界に生きてきたヘンダーソンにとっては、社会科学の成立可能性を確信していたとはいえ、未知の社会科学の領域に足を踏み入れ、パレート・セミナーの開設という船出をしたばかりであったから、ロジャースと知遇を得たことは大きな自信につながったといえよう[17]。

第3節　パレート・セミナーの情況：そのI

最初のパレート・セミナーが終わる頃、ヘンダーソンは、「セミナーが評価され、来年も続けられます」と、ソロキン学科長に感謝の言葉を送っている[18]。

2年目のパレート・セミナーは時間は同じであったが、金曜日に変更され、担当者もヘンダーソン一人となった。この年以降、彼は死ぬまでの10年間、他の講義を代講させても[19]、一人で担当することになる。

ヘンダーソンは、この頃からハーバードの教員に積極的に参加を呼びかけていた。1932年にハーバード大学に招かれたシュンペーターに対しては、「もしあなたにおいでいただけるならば、無上の喜びをわたくしに与えますし、クラスのメンバーにもこの上ない利益となるでしょう」と2度にわたって案内を出し、また法律大学院のディーン（1916-1936）であるR. パウンド（Roscoe Pound 1870-1964）に、そしてソロキンにも案内を出している[20]。

16）Letter from L. J. Henderson to J. H. Rozers, May 16, 1933, Henderson Collection Folder 15-12, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

17）その一年後、ヘンダーソンは再びイェール大学を訪れ、ロジャースのセミナーに参加して講義をし、彼のアパートに招待されて楽しい一時を過ごした。Letter from Vittorio Racca to L. J. Henderson, Dec. 6, 1934, Henderson Collection Folder 15-6, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

18）Letter from L. J. Henderson to P. A. Sorokin, Jan. 23, Henderson Collection Folder 16-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

19）たとえば、1933年-1934年のラドクリフでの「科学15」の講義ができないと、同僚のD. B. ディル（David Bruce Dill 1891-?）教授を推している。Letter from L. J. Henderson to Henry E. Bent, Jan. 6, 1933, Henderson Collection Folder 4-3, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

20）Letter from L. J. Henderson to Joseph A. Schumpeter, May 29, Sept. 19, 1933, to Roscoe Pound, Sept. 19, Oct. 24, and to P. A. Sorokin, Dec. 20, 1933, Henderson Collection Folder 14-4, in Baker Library Archives, Harvard Business School. これらの案内に対して、シュンペーターは9月22日に参加し、また、後に述べるように、ソロキンも12月22日に出席している。*Cf.*, letter from L. J. Henderson to J. A. Schumpeter, Sept. 27, 1933.

こうしてセミナーは、経済学者のシュンペーター、社会学者のT. パーソンズ、G. C. ホーマンズ、歴史学者のC. ブリントン（Crane Brinton）、評論家のB. A. デフォト（Bernard Augustine DeVoto 1897-1955）、また経営学者のG. エルトン・メイヨー（George Elton Mayo 1880-1949）、F. J. レスリスバーガー（Fritz Jules Roethlisberger 1898-1974）、T. N. ホワイトヘッド（Thomas North Whitehead 1891-1969）、そして学科長のソロキン、また外部の研究者や実務家なども参加したのであった。

セミナーは、ヘンダーソンの言葉によると、「読書が指示され、クラスのメンバーによって議論が行われます。自由で率直な議論においては、彼らが発言する内容の腰を折ったり、さらに彼らが依って立つ知識を必要以上に抑えるようなことは、メンバーにとって公正ではないでしょう」というものであった[21]。では、実際はどうであったのであろうか。

すでに述べたように、開講当初は、『一般社会学概論』の英語訳版がなかったので、ヘンダーソンがフランス語版をゆっくり読んでいき、重要な箇所について詳しく説明し、議論を誘発していった。しかしながら、もし誰も発言しないときには彼は椅子から立ち上がり、「なんとまあ、きみらはぼんくらになったのか」と、一人で講義を行うのであった。「こうした行動は、多くの議論を刺激しなかったし、少なくとも出席した小数の院生と若手教員には刺激しなかった」というレスリスバーガーの言葉からして[22]、ピーンと張りつめた雰囲気の中で、ヘンダーソンの独断場が続き、出席者は緊張の連続であったであろう。しかも、彼は「イエス・キリスト」、「赤髭」と称され、厳格で「激しやすい」彼が、「杭打ち機」のように喋りまくるのでは、若手にとって身も凍るような心境であったと思われる。まさに、「われわれのほとんどは、彼に挑むことが命がけであることを暗黙のうちに知っていたのである」[23]。

しかし、例外が一度だけあった。社会学科長のソロキンが出席したときである。ソロキンは、ヘンダーソンからの度々の要請で、いわば義理で参加したといえよう。彼が参加した12月22日のセミナーは、レスリスバーガーもホーマンズも一様に強烈な印象を受けた。それまでのヘンダーソンの一人舞台に、ソロキンは怒りに震えて立ち上がり、ヘンダーソンの主張に真っ向から反論をして、「おそらくレーニン以外には、誰もソロキンを制止できなかった」演説を30分も行った[24]。当然、ヘンダーソンも反論をした。その情況は、「対話などまったくなく、あったのは二人の独り舞台のみであった」という[25]。

もちろん、それ以降、ソロキンは二度と姿を見せることはなかった。ヘンダーソンは、この日のセミナーに関連して、ソロキンに宛てて次のような書簡を送っている。

> あなたからの二通の手紙をうれしく思います。あなたがパレート・セミナーに来たいと思うときは、いつでもそうしていただきたい。とくに、パレートやわたくしと考えが異なるような場合には、あなたの見解を表明してもらうほど有益なことはありませんし、わたくしは、

21) Letter from L. J. Henderson to Jurian A. Ripley, Jr., Oct. 11, 1932, Henderson Collection Folder 14-4, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

22) Fritz J. Roethlisberger, *The Elusive Phenomena: An Autobiographical Account of My Work in the Field of Organizational Behavior at the Harvard Business School*, Harvard University Press, 1977. p. 62.

23) George C. Homans, *Coming to My Seses: The Autobiography of a Sociologist*, Transaction Books, 1984. p. 105.

24) *Ibid.*, p. 105.

25) F. J. Roethlisberger, *op. cit.*, p. 62.

論点を明確に洗い出すことによってのみ、いくつかの困難な問題がわかり得ると考えます。

わたくしは、パレートに関する以外に、ハーバードにおける社会学の発展についてことさらに申し上げることはありません。なぜならば、その学問へのわたくしの知識では、明確な見解をほとんど保証しないからです。パレート社会学については、今やわたくしは、かなり明確な見解を表明することができます。本書には欠陥があるにも拘らず、適切に解釈され、一定の事柄が多少とも関連ないものとして取り除かれるときに、総じていえることは、社会学の文献であれ、科学手続きにとって必要充分条件が何かについての科学方法をより明示的に言及している文献であれ、わたくしが知っているどのようなものよりも、本書は優れて明確な論述を示しています。その他に、研究するにあたって一組の限定された変数を設けたシステムの定義のような一定の明確な成果もあり、全体からしていえることは、本書の大部分において、著者は一貫して自分の規定する手続きに忠実であるという理由から、わたくしは、社会学の研究者に対して、この著作を多少とも継続して研究する機会を提供することが有用であると考えます。

社会学者を除いた人びとの関心については、おそらくわたくしはもっと自信を持った雄弁家となるでしょう。間違っていなければ、哲学者、心理学者、人類学者、歴史学者、精神医学者、法律学者は、本書の研究が有益であることを見いだすような具体的な機会があまりないといえます。これは、アメリカの大学では珍しくない困難な問題をもたらしており、わたくしは、大学において部門別に分かれた組織と排他的な専門的見解によってもたらされる弊害をどのようにして弱めるかを大局的に考えています。科学およびその他の多くの問題に対するパレートの博識 —— そのすべてが社会学者によって普通程度に理解されているわけではありませんが —— のゆえに、わたくしは、本書が、大学の比較的硬直した組織および専門家の伝統によって切り離されている人びとを結び付ける有用な機会を与えてくれると考えています。むろんあなたは、昨年と今年、このセミナーにかなり広い分野からの人が出席し、そのうちの幾人かは定期的に参加していたことをご存知です。もし社会学科がこうした動きを何とかして育成するかあるいは触媒作用となってくれるならば有用でしょうし、長い目でみれば、そうすることが社会学科にとっても知的に有益であろうとわたくしは考えています。しかしながら、提案すべき特定のものをわたくしは何ももっていません[26]。

この書簡に対して、ソロキンは、「あなたの並外れた『見事な管理』を通じて、すでにさまざまな科学を代表する中心的な『クリアリングハウス』になっているセミナーを手伝う限り、わたくしは今後もそうするでしょう」と切り返している[27]。

---

26) Letter from L. J. Henderson to P. A. Sorokin, Dec. 29, 1933, Henderson Collection Folder 16-14, in Baker library Archives, Harvard Business School. 書簡に示されているソロキンからの二通の手紙は見つけることができなかった。

27) Letter from P. A. Sorokin to L. J. Henderson, Jan. 11, 1934, Henderson Collection Folder 14-4, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

当時、ソロキンはアメリカにおける実証主義社会学の指導者であり、ハーバードの社会学構築のために招かれた人物であった。ヘンダーソンの書簡にみられる表現は軟らかいが、明らかに彼のソロキン社会学科長への挑戦である。そこには創設されて間もない社会学科に開講されたパレート・セミナーへの彼の基本的考えをみることができる。すなわち、第一に、科学としての社会学構築に向けたパレート社会学の主要な概念枠組と科学方法の有効性である。第二に、一般理論としてのパレート社会学の重視であり、それゆえのパレート・セミナーの有効性である。ヘンダーソンは専門分化された学問領域での研究の限界を自覚し、学際的研究を可能とする基礎理論としてパレート社会学を位置づけ、セミナーを運営していたのである。

第4節　パレート・セミナーの情況：そのII

さて、経営学分野においては、1926年に「疲労研究所」と「産業調査部」が創設されて以来、ヘンダーソンは、経営大学院のモーガン・ホール（Morgan Hall）の研究室に隣接していたメイヨーと深いつながりを持ち、ホーソン・リサーチを行っているホーソン工場に訪れたこともあった。当然のことながら、パレート・セミナーにおいてもメイヨー、レスリスバーガー、そしてホワイトヘッドは、最初から出席していた。メイヨーは、パレートの残基に関連して、心理学的観点に立った本能の概念について報告を行い、パレート・セミナーに積極的に貢献していた[28]。

また、人間関係論の概念枠組を構築したレスリスバーガーは、メイヨーを「知的母」と呼ぶ一方で、ヘンダーソンを「知的父」と称し、より厳格な思考を持つ彼の「少量の冷水から、大なる刺激を受けていた」[29]。レスリスバーガーが所属していた産業調査部を通じたヘンダーソンとの関係については、稿を改めて明らかにすることとして、パレート・セミナーに限定していうならば、彼がそこから学んだことは、人間行動を論理的行動と非論理的行動とに峻別することの重要性であった。

彼はいう、「パレートが論理—実験的について述べるとき、わたくしはそれを技術の世界に置き換え、彼が非論理—実験的について述べるときには、わたくしはそれを社会空間と呼ぶものに置き換えていた。これらの空間は、異なる存在や関係の中に占められており、わたくしはそれらが混同されるべきではないというパレートとヘンダーソンに完全に一致した」と。とくに非論理的な行動については、「わたくしにとって、人を根元的に人間たらしめるものであった」と述べている[30]。レスリスバーガーの自叙伝である『捉えがたい現象』という書名からしても、彼がパレート・セミナーを通して受けた「人間行動のなんたるものか」は、強烈なものであったと理解され、彼の人間行動理解は、1935年からの「社会学23」への参加を通じて深められ、発展していくのである。

さらにホーマンズとパーソンズもつねに出席していた社会学者であった。ホーマンズは、ハーバード・カレッジでイギリス文学を専攻し、その限りにおいて社会科学とは無縁であった。しかし彼は、学

28）ヘンダーソン・コレクションには、表題は示されていないが、1932年12月5日（鉛筆書きで）、メイヨーによるパレート・セミナーのための5頁のタイプ原稿が収録されてある。Henderson Collection Folder 19-22, in Baker library Archives, Harvard Business School.

29）F. J. Reothlisberger, *op. cit.*, p.

30）*Ibid.*, pp. 60-65.

部のチューターであり、歴史家で評論家のデフォトの紹介でヘンダーソンに出会い、ヘンダーソンによって社会科学研究者として必要な能力と知識を身につけたのである。彼にとってヘンダーソンは、文字通り「パトロン」であった。

彼は、ヘンダーソンの勧めにしたがって、F. ベイコン（Bacon）の『ノヴム・オルガノン』、M. E. モンテーニュ（Montaigne）の*Essais*、クロード・ベルナール（Claude Bernard）の『実験医学研究序説』を読み、パレートの『一般社会学概論』については1930年7月までには読破していた。そして世界恐慌のあおりで失業していたこともあり、彼は、パレート・セミナーには最初から参加をしていた。

彼が、パレート社会学そのものというよりも、それを通じてヘンダーソンからつかみ取ったのは、「科学の一般化」である。それは、データからの斉一性（uniformity）以上の何ものでもなく、新しいデータ、矛盾するデータによっていつでも修正され、無効にされるのである。彼は、「多くの一般化は、データを正確に要約することではなく、むしろ近似的にまとめることである。この理由のために、一般化はさげすまされるべきではない」としている。そして彼は、変数の相互依存性を取り扱ったパレートの社会システムとシステムの均衡概念に注目していたのである[31]。ホーマンズが注目した科学の一般化とシステムの均衡概念は、まさにヘンダーソンの強調しているところである。

そして最初のセミナーが終わる頃、ホーマンズは、セミナーの担当者で、家族の友人でもあったカーティスから、アメリカの読者に向けたパレート社会学の入門書を書かないかという提案を受け、いっしょに入門書を書いたのである[32]。ホーマンズにいわせると、「パレートの書物が社会学であることから、わたくしが唯一読んだ社会学であったが、『入門』を書いたことがわたくしを社会学者にした」のであり[33]、こうしてヘンダーソンが彼を社会学者の道に歩ませたのである。

社会学科の講師であったパーソンズも定期的に出席をしていた一人であった。パレートに対して不定的であった多くの社会学者の中で、彼はむしろ積極的に評価し、ヘンダーソンの『パレートの一般社会学』の書評を行い[34]、自らの処女作となる『社会的行為の構造』にパレートを取り上げるとともに、その「序文」の中で、ヘンダーソンに対して、とくに「一般的な科学方法論とパレートの著作の解釈」に関する援助に感謝の言葉を贈っている[35]。

パーソンズは、ヘンダーソンの死後、チェスター・I・バーナード（Chester Irving Barnard 1886-1961）の求めに応じてヘンダーソンとの交流を回顧している。その内容は、直接パレート・セミナーに結びつくものでないが、二人の関係を示すものとしてここで取り上げておこう。

ヘンダーソンとの交流が、わたくしそのものの成長に非常に大きな役割を果たしたことは

31）G. C. Homans, *op. cit.*, pp. 108-111, and p. 117.

32）*An Introduction to Pareto: His Sociology*, Knopf, 1934.

33）G. C. Homans, *Sentiments and Activities: Essays in Social Science*, The Free Press of Glencoe, 1962. p. 5.

34）"Review of Mind and Society by V. Pareto and Pareto's General Socioligy by L. J. Henderson," American Economic Review Vol. xxv, 1935. pp. 502-508. "Pareto's Central Analytical Scheme," Journal of Social Philosophy, I, April 1936, pp. 244-262.

35）*The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, McGraw-Hill, 1937, The Free Press, 1949. p. vii. 稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造　第1分冊』、木鐸社、1976年．14頁．

真実です。それは、わたくしがケンブリッジに着任した年の1927年―1928年に始まりました。わたくしは若手社会科学者の議論集団への参加に誘われ、その集団がパレートについて話をしてもらうためにヘンダーソンを招いた時でした。わたくしは、パレートについてはきわめて漠然とは聞き知っていましたが、彼の著作のどれも読んだことはなく、『一般社会学概論』に眼を向けさせ、実際に読むようにさせたのは、このヘンダーソンの話でした。これが非常におもしろいものと分かり、相当の期間にわたってそれをあちこちと徹底的に研究しました。けれども、わたくし自身の関心はヘンダーソンとは違っていましたので、それについて実際にわたくしが彼と真剣な交わりを持つようになったのは、わたくしの研究そのものがかなり進んだ段階からでした。わたくしは、経済理論の領域の問題とその社会学的な境界の問題について研究をしておりました。わたくしのもっとも根本的な考えはマーシャルに関する論文に結実し、その多くはわたくしの書物に織り込まれました。この問題に対する非常に異なったパレートの接近方法がわたくしに大いに関心を持たせ、次の主な課題として、この観点からパレートの体系について慎重かつ批判的な分析に着手しました。わたくしは雑誌の論文としてはあまりにも長すぎる原稿を書き、それをどのように扱っていいのかまったく分かりませんでした。わたくしはこれをヘンダーソンにみせ、初めて彼を本当によく知るようになったのは、この批判的な討議においてでした。最終的な結果は、この原稿を単独で公にはせず、これを遠大な研究の中に織り込むという決定であり、それがついには『社会的行為の構造』になったのです[36]。

しかしこれに関連して、ヘンダーソンとわたくしとの意義ある次の交流は、直ちに正式な形でやってきました。わたくしは『構造』の最初の草稿を完成し、出版補助が得られる可能性を求めて、研究助成をしていた社会科学の研究委員会にそれを提出しました。委員会はヘンダーソンにそれを読むようにと依頼をし、彼は、わたくしの人生における主要な知的経験の一つであると証明される連続した長時間の討議を交わすために、わたくしを呼んだのです。少なくともその書物の半分について、わたくしが覚えているうちでおそらくはもっとも徹底した原稿の批判分析を通して、彼はわたくしと一緒にほとんど一文章ごとを入念に検討しました[37]。それはわたくしにとって望外な助けとなり、多くの箇所の重要な改訂となって現れました。わたくしは彼に対してつねに同意をしたのではありませんが、彼の見解はつねに実り多く、わたくし自身の思考にきわめて有用であることが分かりました。それがなかったならば、間違いなく、実際に現れた書物ほどにはいいものにならなかったでしょう。

もう一つの彼との意義ある交流は、これより幾分早い時期から始まりました。わたくしは

36）『社会的行為の構造』の最初の草稿ができたのは、1935年であり、パーソンズは、パレート・セミナーの進行とともにパレート研究の深化を行っていったと思われる。高城和義、上掲書、102頁．矢澤修次郎『現代アメリカ社会学史研究』、東京大学出版会、1984年．235-236頁参照．

37）パーソンズは、別の箇所で、彼の草稿をめぐって、ヘンダーソンが、自分の家で約三ヶ月間にわたって毎週二回二時間、主にパレートとデュルケムに関する章を各節ごとに微に入り細にわたって検討してくれた、と述べている。検討の結果は、パーソンズに改訂を決意させ、改訂のために約一年間を費やしたのである。T. Parsons, *Social System and the Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977. pp. 29-30. 田野崎昭夫監訳『社会体系と行為理論の展開』, 誠信書房, 1992年. 35-36頁.

医療行為の経験研究の意味を考えており、その分野が彼にとっていかに重要であるかを充分に理解しないでおりました。けれども、彼は、わたくしが最初に意見を求めた一人であり、それに関連した彼との会話の初めから、わたくしの構想と思考に非常に重要な影響を与えてくれました。なかでも、医療に従事する医師の精神療法に対する役割と精神身体医学の効果に関心を持ったのは、彼とメイヨーのおかげに大きく依るものでした。これは、彼が「社会システムとしての医師と患者」を書く前のことだったでしょう。ついでに、わたくしはできるだろうと願ってはいましたが、はずかしながらこの研究は未だに完成しておりません。

これらわたくし自身の経験における二つの糸は、わたくしにとって、社会科学の接近に対するヘンダーソンの関心における最も重要な二つの道筋を示すように思えます。一方においては、彼は体系的な理論それ自体に関係してました。わたくしは、一般化された理論的思考の性質と意義において彼がもっとも堅固な会得を有している、わたくしの全く精通していない研究領域での数少ない科学者の一人であると考えています。これが、彼にとってパレートの最高の意味であったとわたくしは確信しており、彼の業績は、他の領域と同じように社会科学においても理論の性質と重要性の解釈者として生き続けていくと考えます。彼の思考における第二の主要な道筋は、臨床的接近です。彼は、医術の専門および科学と実践との相互作用の豊かさに対して深遠な感覚を有しているとわたくしは思っています。もちろん、このことが、ケースの提示ということにおいて、社会学23の非常に重要な役割を果たしました。したがって、わたくしは、ヘンダーソンのこの上ない重要な影響という最高の衝撃を感じ取ることができる方法で、思いもかけずこれら双方の領域に科学的関心を持ったことは幸福であったことに感動しています[38]。

第5節　パレート社会学の執筆と英語訳版の書名

1934年8月、ヘンダーソンに対して、ロンドン大学からパレート社会学のセミナーの依頼が来た。実は、メイヨーがロンドン大学のロンドン経済政治学大学院に行った折、そのスタッフにヘンダーソンがロンドン大学の生理学・生化学科で講義を行うことを教えたことから、「もし時間がおありならば、わたくしどもの大学院に来ていただき、パレートの社会理論を主題として社会学専門家と研究生のセミナーを開いていただくご厚情を賜りたいのですが。メイヨー教授によって、わたくしたちは、あなたがこの主題でお話しされることを知りたいという欲求に駆られたのです」と[39]。

思いもかけなかったヘンダーソンは、この依頼を喜んで引き受け、「生理学者の観点に立ったパレート社会学」という主題でセミナーを行うことにしたが、「わたくしはちょうど、パレート社会学につい

---

38) Letter from Talcott Parsons to Chester I. Barnard, Dec. 31, 1945, Barnard Collection Case 1, in Baker Library Archives, Harvard Business School. 彼は、当時は充分に認めていなかったが、ヘンダーソンの科学哲学と理論の本質の見識が自分の理論的思考の発展にきわめて重要な影響を受けていたことを、後年、告白している。T. Parsons, *op. cit.*, pp. 30-31.『邦訳』, 36-37頁.

39) Letter from L. Evans to L. J. Henderson, August 2, 1934, Henderson Collection Folder 8-4, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

て12,000語くらいの小さな書物を書き上げたところです。これは、一回限りのセミナーでは多すぎます。もう一回か二回くらい増やしてもらえないでしょうか」と希望した。もちろんロンドン大学も異論はなく、当初予定されていた10月15日の他に、18日の生理学・生化学科の講義の前にセミナーを追加して行うことになったのである[40]。

このロンドン大学でのセミナーの基礎となった「小さな書物」とは、1935年に著した『パレートの一般社会学：生理学者からの解釈』であった。

実は、この「小さな書物」の具体的なきっかけは、1933年に、『ザ・サタディ・レヴュー』の編集者からの「パレートの書物に関して、批評でなくとも論文を書いてくれないか」という依頼であった。「時期が来たときに、パレートについて何かを書きたい」と４月に返事をしたヘンダーソンであったが、１年後の1934年5月末に、「近いうちに刊行される英語訳版とはまったく無関係である」としたパレート社会学の評論を書き上げたのである[41]。

ヘンダーソンが「英語訳版とはまったく無関係である」と強調した評論は、もともと『一般社会学概論』の英語訳版に「序文」として載せられないか、とデフォトを通して出版社のハーコート社に提案していたのであったが、残念ながらマダム・パレートから断られたのである[42]。その年の夏に、ヘンダーソンは、3,000語の評論を25,000語まで増やして「小さな書物」にまとめた。それは、マダム・パレートに断られ、一度は自分を抑えたが、止むに止まれぬ気持ちから著したのであった。これを書いた動機を、英語訳版を出版するハーコート社に送った書簡の中で、次のように述べている。

> わたくしが小論を書いた主要な動機は、わたくし自身の頭脳から何かを得たいという気持ちは別にして、わたくしが真実であると信じることを明確にすること、そしてパレートの書物の研究が歴史学、政治学、経済学、法律学、神学などのような非常に多様な主題を理解するために有用で、まさに不可欠な予備知識を提供することにあったのです。
>
> この目的の達成にあたって、この小論がかなり成功すると考える理由がわたくしにはあります。というのは、この小論がそれを非常によく考えていると思われる多くの人々によって読まれてきているからです[43]。それはすぐに公刊されるべきであり、できる限りの販売努力がなされるべきである、というのがわたくしの希望です。わたくし自身の商品を大衆に強力に売り込む努力をすることはわたくしの気質ではありませんが、この場合には、そうすることがこの小論を書くわたくしの動機と一致しているのです。もしこのような一片の著作がい

40) Letter from L. J. Henderson to L. Evans, Sept. 18, and from L. Evans to L. J. Henderson, Sept. 28, 1934, Henderson Collection Folder 8-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

41) Correspondence between L. J. Henderson and Henry S. Canby, April 11, 1933, April 13, 1933, and May 28, 1934, Henderson Collection Folder 3-13, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

42) ヘンダーソンと同じように、ロジャースと訳者のリヴィングストンも希望していたが、リヴィングストンには注釈を除いてはいずれも断られている。Letter from D. C. Brace (Harcourt, Brace and Company) to DeVoto, May 22, 1934, Henderson Collection Folder 6-8, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

43) たとえば、ヘンダーソンの評論に対して友人でもあるローウェル総長から批評が送られている。Letter from L. A. Lowell to L. J. Henderson, May 28, 1934, Henderson Collection Folder 8-13, in Baker Library Archives, Haravard Business School.

わば1ドルで公刊され、売られることができるならば、その効果は、わたくしと同じように、あなたにとってもきわめて興味あることになるだろうとわたくしは考えます。それゆえに、このように説明するのです。

...あなたが、なぜこの小論を好まないか、わたくしの頭に浮かんだ一つの考えられる特別な理由があります。わたくしは終始一貫してパレートの書物を一般社会学と呼んできたのであり、あなたがたの採用した書名は人を誤らせるものであると考えています。

どのようにしても、イタリア語およびフランス語の書名の直訳に代えて、さまざまな点での問題を曖昧にすることなく、あなたがたが採用した書名を取り入れることができませんでした。原稿が示しているように、わたくしは、あなたがたの観点からして不利益であるような内容を含むものは一切ないと思います、がしかし、あなたがたの表題に対する唯一の言及が一つの脚注にあります[44]。

しかし、ハーコート社は、ヘンダーソンの申し出に対して恐縮しつつも、「...『一般社会学概論』では明らかに教科書のように聞こえ、一般読者を逃すというゆゆしきことになってしまいます」という理由で、断ったのである[45]。

こうして1935年5月、パレートの『一般社会学概論』は、英語訳版として『心と社会』(*Mind and Society*) という書名で公刊された[46]。

すでに明らかにしたように、英語訳版の書名が『一般社会学』にならなかったことは、二つの意味においてヘンダーソンの意図に明確に反するものであった。第一の意味は、実際の書名が『心と社会』になったことであり、第二の意味は、書名から“generale”がないことであり、ともに彼にとって容認しがたいものであった。まず、第一の意味を明らかにしてみよう。

パレートは、『一般社会学概論』の§186から§218にかけて天候と儀式の関係を取り上げ、古代ギリシャの哲学者のエンペドクレス (Empedocles)、プルターク (Plutarch)、地理学者のパウサニアス (Pausanias)、歴史家のヘロドトス (Herodotus)、古代ローマのキケロ (Cicero)、セネカ (Seneca)、ローマ皇帝でストア哲学者のマルクス・アウレリウス (Marcus Aurelius) など多くの言説を引用し、それを通して人間の非論理的行動を浮き上がらせている[47]。

パレートが選び、引用したのは、天候を変えようとする人間の行動であった。嵐や雨などの天候に対

---

44) Letter from L. J. Henderson to D. C. Brace, Sept. 22, 1934, Henderson Collection Folder 6-8, in Baker Library Archives, Harvard Business School. ヘンダーソンが述べているように、彼の『パレートの一般社会学』には、確かに英語訳版に言及されているところが一箇所ある。ただそれは、原著の英語訳版として示されているだけであって、それ以外なにも触れられていないという徹底さである。*Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*, Cambridge, Harvard University Press, 1935. p. 5. 組織行動研究会訳『組織行動論の基礎：パレートの一般社会学』、東洋書店、1975年. 22頁.

45) Letter from D. C. Brace to L. J. Henderson, Sept. 24, 1934, Henderson Collection Folder 6-8, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

46) *Mind and Society*, Trans. Eng. by A. Bongiorno and A. Livingston (ed. by A. Livingston), 4 vols, New York, Harcourt, Brace and Company, 1935, reprinted, 2 vols., 1963.

47) Vilfred Pareto, *Traité de Sociologie Générale*, Librairle Droz Genéve, 1917, 1968. pp. 97-127. *Mind and Society* (Trans. Eng.) pp. 111-145.

して人間は祈祷をし、いけにえを捧げる。そのいけにえは、白い鶏であったり、黒い羊であったり、あるいは人柱である。これらの人間の行動に対して、魔法とか悪魔というものによってさまざまに説明が用いられてきた。こうした儀式と天候を結び付ける説明は、人間の心の世界の問題であるが、パレートはその解釈にこだわらなかった。つまり、パレートは、なぜいけにえが必要であるのか、悪魔と神とがどのような関わりがあるのか、という心理学上の、あるいは形而上学の問題には入り込まなかった。

彼は、基本的に観察され得る世界の中、つまり人間の行動や語られる言葉を扱い、行動や会話という事実の中にみられる人間の行動の斉一性に注目したのである。つまり、「われわれが嵐に結び付けて検討してきた多くの事例のすべては、共通した何物か、一定である何物かを有している。すなわち、それによって嵐が影響を受けられるという一定の方法があるという感情である」[48]。

そうした斉一性から、パレートは、「ほとんどの人間は、天候が人間によって変えられるという感情として記述される、ある仮説的な心理状態を表出する」という作業仮説ないし概念枠組を設け、他の現象の観察、それらの事実から斉一性を発見し、概念枠組を拡大しようとしたのである。その概念枠組を真偽の問題として考えることは、心理の世界に入り込むことを意味し、まったく意味のないことであるとし、パレートは、人間の言葉ないし行動という観察される世界に限定して、人間の非論理的行動を明らかにしようとしたのである。

このように、パレートは心の世界に入り込まず、観察される世界に対してきわめて慎重な態度で分析を行い、科学としての社会学を構築しようとしたのである。それゆえに、ヘンダーソンならずとも、「...『心と社会』という英語訳版の書名は、彼が行ったことの根本的な思い違いをほとんどの人々にもたらすものである」[49]。ヘンダーソンが評論を書いたときに、「英語訳版とはまったく無関係である」と強調したのは、このような理由からであり、まさに、『心と社会』は、「不幸な書名」[50] であったといえよう。

次に、第二の意味である。

『心と社会』の発行は5月23日であったが、ほぼ同じ日付で発行されたのが、先に述べた評論「パレートによる社会の科学」であった[51]。この評論の原稿をあらかじめ読んだロジャースの同僚で、パレートの元助手であったV. ラッカ（Vittorio Racca 1876-1957）は、「この主題についてわたくしが今までに読んだ中で、もっともよく均衡がとれ、もっとも厳密で、もっとも人間的です」と賛辞を贈った[52]。

他方、「諸大学でパレートの研究を効果的に押し進めたいという私の希望であり、この目的のためにこれが出版されるのが早ければ早いほど望ましいと考えます」[53] としたヘンダーソンの「小さな書物」は、1934年の12月には書き上げられ、翌年の春、ハーバード大学から出版の申し出があり、『パレー

48) *Ibid.*, p.126. Trans. Eng. p.144.
49) Letter from L. J. Henderson to Northrop, Oct. 15, 1935, Henderson Collection Folder 10-1, in Baker Library Archives, Harvard Business School.
50) G. C. Homans, *op. cit.*, p. 103.
51) "Pareto's Science of Society," *The Saturday Review of Literature*, May 25, 1935.
52) Letter from V. Racca to L. J. Henderson, May 24, 1935, Henderson Collection Folder 15-6, in Baker Library Archives, Harvard Business School.
53) Letter from L. J. Henderson to H. S. Canby, Sept. 11, 1934, Henderson Collection Folder 3-13, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

トの一般社会学：生理学者の解釈』という書名で、5月25日ないし26日に発行された[54]。この書物は、彼の最期の書物となったのである。

「パレートによる社会の科学」と『パレートの一般社会学』とは、執筆の過程から推察されるように、ほぼ同じ内容である。つまり、『パレートの一般社会学』は、本論と13のノートによって構成されており、その本論は「パレートによる社会の科学」に若干の修正と肉付けを行ったものである。そして新たに執筆したノートは、ヘンダーソンが、「わたくしは力の限りを尽くして、関連する用語を定義づけ、包含されている諸現象の本質を説明」しようとして、いくつかの問題点を明確にし、読者に理解を深めてもらうために、本論に加えたものである[55]。

評論の表題にある「社会の科学」は、パレートの社会学が社会科学の基礎理論であることを示している。パレート理論の主要な特徴は、社会システムにおける諸変数の相互依存の変動状態に関する分析にある。歴史学、文学、経済学、社会学、法律学、政治学、神学、教育学などは、さまざまな関係にある人間と人間が織りなす相互作用、彼らの感情や利害、彼らの言行に関わっており、そうした情況は多くの変数を含む相互依存の状態であり、パレートの社会システムという概念枠組みを通して解明されなければならない。ヘンダーソンは、「パレートの社会学は、それが経験による検証に耐えうる限り、第一の部類のすべての学科目（上に示した科目）に応用されるように思われる。パレートが『一般社会学概論』という書名を選んだのは、このような理由からである」と主張している[56]。パレートの一般社会学に対するヘンダーソンの狙いは、「小さな書物」を「社会の科学」という性格を持たせた『パレートの一般社会学』として、人間と人間が織りなす社会を解明するという科学の一般性にあったのである。

こうして、ヘンダーソンは、『パレートの一般社会学』の公刊を通じて社会科学の成立を確信し、かつパレート・セミナーも3年目を迎えた。彼は、友人に宛てた書簡に、「過去3年間セミナーをやってきましたが、社会現象を分析するにあたって、科学方法の基礎として役に立つことがわかりました。さらに重要な結果は、パレートの書物を読んだ後、その概念枠組を使い、その使用は便利で、かつ有益であることがわかりました」と述べている[57]。

しかし、まだその歩みは始まったばかりで、いよいよ正念場ともいえる「社会学23」が開設されるのである。

（1995年10月4日受理）

54) *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation,* Cambridge, Harvard University Press, 1935. 組織行動研究会訳『組織行動論の基礎：パレートの一般社会学』，東洋書店，1975年．公刊された同じ5月に、ヘンダーソンは、ミシガン大学の社会学科で、「科学方法とパレートの貢献」と題して講演を行っている。Correspondence between L. J. Henderson and Mckenzie, March 13, 16, 19, April 5, 17, and May 10, 1935, Henderson Collection Folder 3-13, Henderson Collection Folder 9-3, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

55) *Ibid.*, p. 70.『邦訳』，110頁．日本語訳版の書名についても、副題には生かされているとしても、主題に「一般」という言葉がないのは、ヘンダーソンの意図に反するものであろう。

56) *Ibid.*, p. 15.『邦訳』，44頁．括弧内は、引用者による。この主張は、英語訳版の書名に "générale" がないことから、あえて強調されたと考えられる。

57) Letter from L. J. Henderson to L. Levy Bruhl, Dec. 31, 1935, Henderson Collection Folder 3-13, in Baker Library Archives, Harvard Business School.